

Linguistic Change in an Interlanguage : Formula X

広島大学大学院 佐々木 みゆき

1. 背景と目的

中間言語の研究は、1970年代に盛んに行われた Error Analysis や Morpheme Studies の弱点を踏まえて、中間言語発達の product よりもむしろ process にその焦点を移してきたと言われる。それはまた、Long and Sato (1984) が概観しているように、product として出てきた言語の form のみを重視する、または、その form がどれだけ Target Language の form に近いかだけを問題とする“form only analysis”から、学習者の視点に立ち、中間言語のある form が、どのような機能 (function) を持っているかを、総合的、発展的に分析しようとする“form-to-function” analysis や、ある機能が、文法的にどのような form に encode されてゆくかを分析する“function-to-form” analysis への転換でもあった。¹

本研究では、そのような歴史を背景にして、分析の対象となるデータの form と function の両面に注意を払いながら、以下の2点を目的とした。

- (1) 当該中間言語に現れた「公式X」における form と function との関係性を明らかにし、この関係性が10か月間の間に経る変化を記述すること。
- (2) 当該中間言語におけるこのような変化は、当該中間言語組織全体の変化を反映しており、統一的で規則的であることを示唆すること。

2. 研究の方法

2.1. 研究の対象

本研究の subject は、9才の日本人少女 Kazuko である。Kazuko は、1976年3月15日に日本で生まれ、1984年12月3日、8才9か月の時に、両親と2人の弟と共に渡米し、メリーランド州の地元の小学校3年生に編入された。Kazuko の渡米前の英語に関する知識は、殆ど皆無に近い状態だった。

2.2. データ採取

データは、Kazuko がアメリカにやって来た約2か月後の1985年2月から約10月間に渉り、前半の5か月間は、月1回、後半の5か月間は、Kazuko の進歩の速度に追いつくように、月2回、月平均1.5時間の割合でテープに録音したものを、英語の伝統的正字法 (traditional orthography) で転写したものである。録音は、全て Kazuko の自宅で行われ、筆者と Kazuko、Kazuko の弟2人、それに、Kazuko からできるだけ英語を引き出すために、一人必ず英語の native speaker を交えて、楽しい遊びやおしゃべりの雰囲気の中でなされた。

2.3. 対象データ

本研究の対象データは、2.2.で説明された録音で採取された spontaneous utterances である。全データは、1か月分のデータを1サンプルとした、サンプル1からサンプル10までの計10サンプルである。(たとえば、サンプル1は、データ採取を始めた最初の月からのデータを、サンプル6は、データ採取を始めて6か月目の月からのデータを指している。)

3. 分析

3.1. 対象となる form: 公式 X

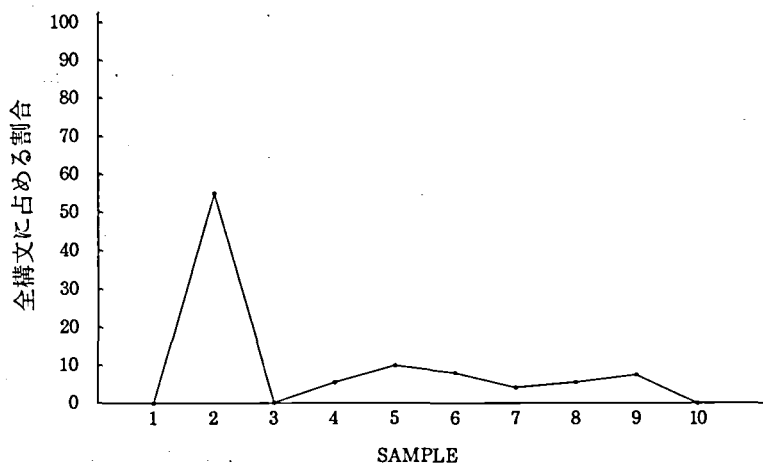
本研究の対象となる form は、本研究で便宜上公式 X と名付けた文型である。公式 X は、下掲の 2 例のように、「名詞句 + Be 動詞 + X (X は少なくとも 1 つの一般動詞の原形または過去形を含む)」という構造を持っている。

> Look, bad queen is shoot, shoot (=The bad queen shoots the princess) .
 NP Be X

> Shoes is tiger give (=Sambo gives his shoes to the tiger) .
 NP Be X

公式 X は、Kazuko の中間言語のサンプル 10 を除く全データに現われ、特に初期のデータでは、全構文の 50% 以上を占めている月もあるため、本研究の分析対象として取り上げた。公式 X の全構文に占める割合のサンプル毎の移り変わりを図 1 に示した。

図 1 公式 X の全構文に占める割合のサンプル毎の移り変わり

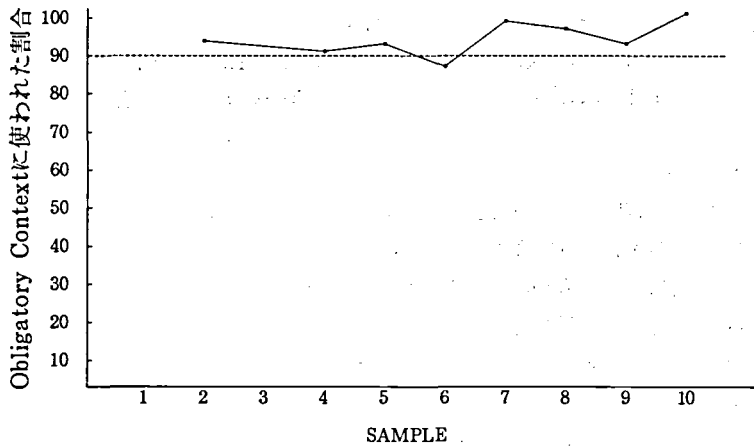


3.2. Form Only Analysis

英語の標準文法では、Be 動詞の後には、動詞の原形も過去形も来ることができないので、公式 X は、非文法的な文である。それでは、他の、本当に Be 動詞が使われるべき場面では、Kazuko は、Be 動詞を正しく使っているのだろうか？ 図 2 は、Kazuko が、Copula としての Be 動詞を、本来使われなければならない場面 (obligatory contexts) で、どの位の割合で使っているのかの、サンプル毎の移り変わりを示している。この表をみると、Kazuko の Be 動詞の使用は、Sample 2 の初期から、obligatory contexts に 90% 以上 supply されているいわゆる「習得レベル (acquisitional level)」の周辺にあり、一見 Kazuko は、Be 動詞の用法を習得したかのように見える。しかし、前述のように、Be 動詞は、本来使われるべきではない非文法的な公式 X にも登場するので、このように中間言語の form のみを、目標言語である英語の正文法と比較する Form Only Analysis は、form と function がダイナミックに関係しながら変化する中間言語の分析方法としては、不十分と言える。これが、まさに、70年代に盛んに行われた Form Only Analysis の代表としての Morpheme Studies の重大な弱点でもあった。そこで、次項以降は、公式 X という form が、Kazuko の中間言語の中でどのような機能を持っているのかを探る一種の Form-to-Function Mode Analysis を応用して、分析を進めてゆき

たい。

図2 Copula としての Be 動詞の習得曲線



3.3. Form-to-Function Analysis

3.3.1. 談話・機能的概念 Topic/Comment と統語・文法的概念 Subject/Predicate

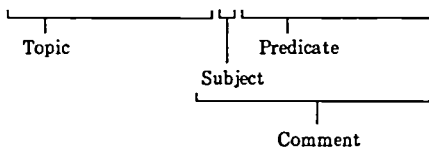
サンプル 1～9 に現れたそれぞれの公式 X を機能別に分類するにあたって、語用論の用語である Topic/Comment と文法の用語である Subject/Predicate の概念を応用するのが適切であることが分った。

Topic とそれを補う概念である Comment と、Subject とそれぞれを補う概念である Predicate については、様々な定義が試みられてきた。本研究では、これらの概括的な定義として、以下の Longman Dictionary of Applied Linguistics の定義を採用する。²

topic² n

in describing the INFORMATION STRUCTURE of sentences, a term for that part of a sentence which names the person, thing, or idea about which something is said (the comment). The concept of Topic and Comment is not identical with SUBJECT and PREDICATE. Subject-Predicate refers to the grammatical structure of a sentence rather than to its information structure (see SUBJECT-PROMINENT LANGUAGE). The difference is illustrated in the following example:

As for your drycleaning, I will bring it tomorrow.



subject/ 'Sʌbdʒɪkt/n

(in English grammar) generally the noun, pronoun or NOUN PHRASE¹ which:

- (a) typically precedes the main verb in a sentence and is most closely related to it
- (b) determines CONCORD
- (c) refers to something about which a statement or assertion is made in the rest of the sentence.

That part of the sentence containing the verb, or VERB GROUP (and which may include OBJECT, COMPLEMENTS, or ADVERBIALS) is known as the PREDICATE. The predicate is that part of the sentence which predicates something of the subject. For example:

<u>subject</u>	<u>predicate</u>
<i>The woman</i>	<i>smiled.</i>
<i>Fish</i>	<i>is good for you.</i>

In some sentences in English, however, Topic-Comment and Subject-Predicate are identical. For example:

<i>Hilary</i>	<i>is a dancer.</i>
Subject	Predicate
Topic	Comment

3.3.2. Topic-Comment の構造と Subject-Predicate の構造

3.3.1. で定義した Topic-Comment を基本文型とする言語は、Topic-Prominent Language (以下 Tp language) と呼ばれ、Subject-Predicate を基本文型とする言語は、Subject-Predicate Language (以下 Sp language) と呼ばれる。³ Li and Thompson (1976) によれば、英語は、典型的な、Sp language であり、日本語は、Tp language と Sp language の中間に位置している。⁴

3.3.3. 公式Xの分類

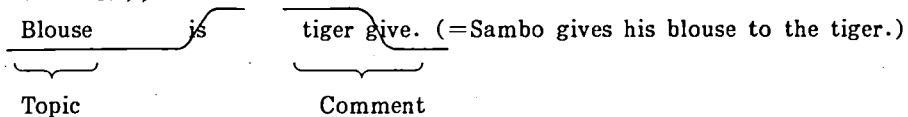
以上述べたような観点から公式Xを3つのタイプ(タイプA, B, C)に分類した。

タイプAは、次の4つの特徴を持っている。

- (1) 最初の名詞句は、文の Topic ではあっても Subject ではない。
- (2) Be 動詞はいつも、3人称単数現在の “IS” である。
- (3) Xの部分は、(1)の Topic に対する Comment である。
- (4) 文全体は、2つのイントネーション・ユニット (Be 動詞の終わりまでの rising intonation と短い pause に続く文末までの falling intonation) から成る。

以下に1例を示す。

- (Kazuko is explaining one scene from the Japanese picture book, *Little Black Sambo*. In the story, Sambo meets tigers in a jungle and give his belongings to them.) (サンプル2より)

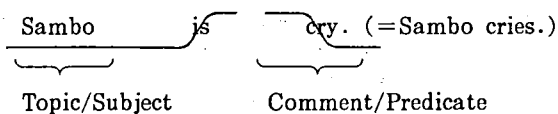


タイプBは次の4つの特徴を持っている。

- (1) 最初の名詞句は、文の Topic にも Subject にもなり得る。
- (2) Be 動詞の93.5% (29/31) は、タイプAのBe 動詞のように、“IS” である (あとの2つは、“are” と “were”)
- (3) Xの部分は、文の Comment にも Predicate にもなり得る。
- (4) タイプAと同じ2つのイントネーション・ユニットから成る。

1例を以下に示す。

- (Kazuko is explaining a scene from *Little Black Sambo* / In the story, Sambo cries because he has to give away all his belongings to the tigers.) (サンプル2より)



タイプCは、次の4つの特徴を持っている。

- (1) 最初の名詞句と Be 動詞は、常に短縮型の “I’m” 又は、“It’s” である。
- (2) 最初の名詞句の92.9% (26/28) は、タイプBと同じように、文の Topic にも Comment にもなり得るが (タイプC-1) , 残りの7.1% (2/28) は、いわゆる dummy subject とよばれるもので、Topic にはなり得ない (タイプC-2) のものである。
- (3) Xの部分は、上のタイプC-1では、Comment と Predicate のどちらにもなり得、タイプC-2では、Predicate である。

(4) タイプA, Bと違い, 1つのイントネーション・ユニット (rising 又は, falling intonation) から成る。

タイプC-1とタイプC-2の例を以下に示す。

● Type C-1 "I'm"

(Kazuko, her younger brother, the native assistant and the writer are playing BOUZUMEKURI, a kind of a Japanese card game.) (サンプル5より)

I'm pick up princess. (=I'll pick up a card with a picture of a princess.)

Topic / Subject Comment / Predicate

● Type C-1 "it's"

(Kazuko is explaining about a kind of a pencil case which her friend has.)(サンプル8より)

... it's ha, have hole on it... (=it[a pencil case]has a hole on it.)

Topic / Subject Comment / Predicate

● Type C-2

(Kazuko is talking about her trip to see the fireworks on the fourth of July.) (サンプル6より)

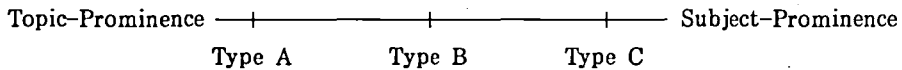
... it's shower. (=it showered.)

Subject Predicate

3.3.4. タイプA, B, Cの類型化

以上の特徴から, タイプAでは, 語順, be動詞, イントネーションの3つの点で, またタイプBでは, Be動詞, イントネーションの2つの点で, TopicとCommentの境界が明示されていることが解る。このような表層構造でのTopicの明示は, Tp languageの大きな特徴の1つである。しかし, タイプBでは, 構文全体として, Topic-Commentの構造ともSubject-Predicateの構造ともとれる点で, タイプAより, Topic-Prominenceの割合が低い。さらに, タイプCでは, タイプAやBで見られたような表層構造でのTopicの明示は持っておらず, また, 1部ではあるが, Sp languageの特色であるdummy subjectを有するところも, 前述の両タイプに比べて, よりSubject-Prominenceの度合いが高いと言える。⁶

そこで, 3つのタイプをTopic-ProminenceとSubject-Prominenceを対極とする連続線上に位置付けると, 以下のように略図化することができる。



3.3.5. 各サンプルにおけるタイプABCの割合

表1は, 各サンプルに現れたタイプA, B, Cそれぞれの割合を示している。この表から, 公式Xは, 図1に見られたように全体として数が減少している一方で, その構造内容もタイプAからCへと移り変わっていったことが解る。このTopic-ProminenceからSubject-Prominenceへの移り変わりは, Topic-Prominent的傾向を持つ日本語からの影響を脱して, 目標言語である英語に近付きつつあるためなのか, Givon (1979) の言う言語ユニバーサルとしてのsyntacticization (統語化現象) にKazukoの言語発達も従っているためなのかは, 本研究

だけでは明確ではない。⁷ しかし、上記の分析によって、従来の form のみに焦点を当てた研究では単に目標言語の未熟な形、又は誤りとして片付けられていた公式Xのような構造も、その機能の面からみても独自の統一的で規則的な機能を持っており、組織性を持って変化してゆくことが明らかにされた。

表1 各サンプルに現れたタイプABCの割合

Sample		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
Type A	%	0	34.8	0	0	0	0	0	0	0	0
	#	0	8	0	0	0	0	0	0	0	0
Type B	%	0	65.2	0	0	17.6	58.3	100	40.0	33.3	0
	#	0	15	0	0	3	7	2	2	2	0
Type C	%	0	0	0	100	82.4	41.7	0	60.0	66.7	0
	#	0	0	0	2	14	5	0	3	4	0

3.3.6. 公式Xが、Kazukoの中間言語の全構文に占める位置

それでは、このような公式Xの変化は、Kazukoの中間言語全体の構文中では、どのような位置を占めているのであろうか。表2は、当該データに現れた全構文の種類とその割合の変化を示している。表中、Serial Verb Constructionとは、Tp languageに特有の構文で、下掲の例のように、公式XのタイプAやBにみられたようなトピック・マーカースとしての“IS”を持っている。

- (Kazuko is explaining the rules of a card game.) (サンプル5より)
If you no card, and then, many card have person is win. (=If you have no card, and then, the person who has many cards will win.)

又、“S + Copula + C (主語+BE動詞+補語)”の構文にも、特に初期に、下例のように明らかに Topic-Comment の構造を持つとみられる構文がしばしばみられた。

- Sambo is hundred sixty-nine. (=As for Sambo, he eats hundred sixty-nine pieces of pan cakes.) (サンプル3より)
Topic Comment

この表2にみられるそれぞれの構文の移り変わりから、前述のような公式Xの変化と並行して、Topic-Comment 的構造を持つ Serial Verb Construction や、Topic-Comment の構造を盛り込みやすい「AはBである」の組み立てを持つ“S + Copula + C”の構文が減り、Subject-Predicate の構文を盛り込みやすい“S + (aux.) + L (主語 + [助動詞] + 一般詞)”の構文が相対的に増加していったことが解る。

図2 当該データに現れた全構文の種類をその割合のサンプル毎の変化

Sample		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
Formpla X	%	0	52.3	0	2.4	6.9	4.4	0.6	1.2	2.7	0
	#	0	23	0	2	17	12	2	5	6	0
Serial Verb Construction	%	0	0	0	0	0.8	0	0.3	0.2	0	0
	#	0	0	0	0	2	0	1	1	0	0
S + Copula + C	%	0	34.1	0	50.0	19.8	20.7	14.1	23.2	10.9	14.7
	#	0	15	0	41	49	56	46	94	24	65
S + (aux.) + L	%	0	13.6	100	47.6	72.6	74.8	85.0	75.3	86.4	85.3
	#	0	6	1	39	180	202	277	305	191	378

3.3.7. Kazuko の今後の言語発展の予想

以上のような、当該サンプルに現れた構文全体の流れを考え合わせると、以下の2点が、Kazukoの今後の言語発展の予想として考えられる。

- ① 公式Xは、タイプCも含め、英語の正文法に適う“S+(aux.)+L(主語+[助動詞]+一般動詞)”型の文型へ吸収され、消滅するだろう。
- ② 他の Topic-PROMINENT 的構文も、英語の正文法に適うもの(=S+Copula+C)以外は消滅するだろう。

[引用文献]

- 1) M. H. Long and C. J. Sato, "Methodological Issue in Interlanguage Studies: An Interactionist Perspective," in A. Davies, C. Cramer and A. Howart (eds.), *Interlanguage* (Edinburgh: Edinburgh University Press, 1984), pp.265-271.
- 2) J. Richards, J. Platt and H. Weber, *Longman Dictionary of Applied Linguistics* (Harlow: Longman, 1985), p.296.
- 3) *Ibid.*, p.279.
- 4) C. N. Li and S. A. Thompson, "Subject and Topic: A New Typology of Language, in Li(ed.), *Subject and Topic* (New York: Academic Press, 1976), p.483.
- 5,6) Tp language と Sp language の特徴については, *Li and Thompson* (1976), pp.466-471 参
- 7) Syntacticization については, T. Givon, "Form Discourse to Syntax: Grammar as a Processing Strategy," in T. Givon (ed.), *Syntax and Semantics, vol. 12: Discourse and Syntax* (New York: Academic Press, 1979), pp.81-112. 参。また, 第1言語からの影響ではない第2言語習得における syntacticization の例としては, M. Sasaki, "CHANGE IN INTERCLAUSAL RELATION: UNIVERSAL SIDE OF SECOND LANGUAGE ACQUISITION," in 中国地区英語教育学会研究紀要, No.17,1987, pp.43-54.